



マリアンヌと私

熊谷 謙介（非文字資料研究センター 研究員）

今年度から、非文字資料研究に参加させていただくことになりました。『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究と題して、鳥越輝昭主任研究員の下、小松原由理先生とともに、『日本常民生活絵引』のヨーロッパ版を作成することを目下の目標としています。先生方が積み上げてきた実績とノウハウを生かしながら、近代ヨーロッパの人々の生活という新しい分野を開拓できればと考えています。

私事ながら、私は大学院時代、東京大学（駒場）の表象文化論というところに在籍していました。今では「表象」という言葉も一定の市民権を得た感がありますが、当時は知人や親戚に所属先を教えるたびに「ヒョーショー？（表彰?）」と聞き返されたものでした。そんな時には、「一つの想いを伝えるにしてもたくさんの伝え方がある、文章で伝えてもいいし、絵でも音楽でも伝えられるかもしれない。そうした表現のメカニズムを研究しているのだ」と答えるようにしていました。これでどこまで納得してもらえたかは非常に不安ですが、その後私自身はフランスに留学し、マラルメという、言葉に極限までこだわった詩人を研究することになります。しかし、そこで選んだテーマは、密室の詩人とされたマラルメが終生熱望し続けた「祝祭」でした。語をパズルのように組み立てる詩人と、祝祭に集まる民衆の言葉にならない熱気——、言葉と身体、文字と非文字の関係こそが私の研究を導くものであったと、今から見ればそう言えるのかもしれませんが。

今回はこのような自己紹介とともに、ある一人の女性をみなさんに紹介したいと思います。フランスでは人々が毎日どこかで見ている女性なのに、世界的にはほとんど知られていない女性がいるのですが、彼女の名前はマリアンヌと言います、姓はありません¹。全国ほとんどの市役所に彼女の彫像が置かれているだけでなく、貨幣や切手のデザイン（図1）にも使用されている、フランス共

和国を象徴する「女神」なのです。ドラクロワが1830年の革命時に描いた《民衆を導く自由の女神》（図2）や、ニューヨークにあるバルトルディ作の「自由の女神」も彼女の一つの姿であるといえ、イメージしやすいのかもしれませんが。とはいえ後者は、アメリカ独立百年を記念したにもかかわらず、110年後の1886年に寄贈された「遅れたプレゼント」だったのです²。

しかし、彼女がフランスを象徴することに誰も不平を言わなくなったのは、そんなに前のことではありません。



図1 0.02 ユーロの切手と、0.20 ユーロ硬貨（フランス）の表。



図2 ユージェーヌ・ドラクロワ《民衆を導く自由の女神》（1830年）（ルーブル美術館蔵）



図3 アラール・カンブレ《女神マリアンヌを訪ねるマダム・ティエール》(神奈川県立美術館蔵)『神奈川県立美術館所蔵パリ・コミューンの諷刺画—1871年ペンと大砲の市民革命』平塚市美術館、2003年、97頁。

彼女が姿をはっきりと現したのは、やはりフランス革命の最中です。それまでは、国家を端的に示すものは国王の肖像で十分でした。「朕は国家なり」はルイ14世が言ったとされる有名なセリフですが、国家への愛を育むのに王個人のイメージへの愛から始めるのが、一番の近道でした。したがって、革命政府の課題は、国王の肖像に代えて、誰も代表しない共和国をどのように表象するか、「自由・平等・博愛」という共和国の抽象的な原則を、どのように民衆にとって理解しやすいものにするか、ということになります。

マリアンヌが特に象徴していたのは、「自由」でした。赤いフリジア帽は、古代ローマの解放奴隷がかぶっていたものであり、つまりは隷属からの自由を意味していました。しかし、この赤という色が、のちに社会主義と結びつけられ、共和国の穏健派と革新派の間での、イメージをめぐる闘争を導くことになります。一方では、古代風衣装に身をしっかりと隠し、フリジア帽に代えて月桂樹の冠をかぶった、母親的マリアンヌ。他方では、脚も胸も露わにし、激情に髪をなびかせる若い娘としてのマリアンヌ。政治的表象は女性表象の問題へともつながっていくことが分かりますが、穏健派であれ革新派であれ、男性政治家がどのように女性＝共和国と接するかという、男性中心的な視線を感じなくもないでしょう。

実際、フランスという国が汚辱にまみれたり、政治の腐敗が暴かれたりするとき、女神マリアンヌもまた「娼婦」として貶められることとなります。普仏戦争の敗戦やそれに続くパリ・コミューンの際の諷刺画では、武器をとるパリ市民を表したマリアンヌが描かれる一方で、共和国を娼婦マリアンヌとして、王政に近い政治家をや



図4 アラン・アスラン《ブリジット・バルドーの顔の共和国像》(1969年)(フランス国立美術館協会) *Entre liberté, république et France : les représentations de Marianne de 1792 à nos jours*, Vizille, Musée de la Révolution française, Paris : Réunion des musées nationaux, 2003, p.88.

り手婆として登場するものも見られます(図3)。この諷刺画は神奈川県立美術館に所蔵されている貴重なコレクションの一つであり、その全体としての分析もこれからの研究の課題となるでしょう。

このように革命から百年間揺れ動き続けたマリアンヌの表象も、1880年の7月14日革命記念祭の法制化とともに国民に定着することとなります。自由の女神から共和国の女神、そしてフランスの象徴へ——、このような女神の転身は半面、市場経済、大衆社会に「身を落とす」ことも意味していました。マリアンヌがメダルや小さな人形として大量に売られるのはこの時期からであり、逆にマリアンヌを真似た現実の女性が祝祭に登場することもよくありました。20世紀の後半に至っては、これは「フランス的」と言ってしまうとよいかは分かりませんが、目下活躍している女優などをモデルにマリアンヌの彫像を制作することが、半ば公的に続けられています。ブリジット・バルドーのマリアンヌ(図4)、カトリーヌ・ドヌーヴのマリアンヌ……「アイドル」マリアンヌは長い歴史を有しているのです。

聖と俗、マリア崇拜との関係、良女(女神)と悪女(娼婦)……マリアンヌのこうした両義性こそフランスの民衆の関心を二百年以上引き続けた理由ではないでしょうか。そして、抽象的なものを愛しながらも、それを具体的なものにし、イメージ化することに血道を上げるフランスについて、視覚資料を通じてこれからも調べ続けたいと考えています。

i 邦訳されている研究書としては次が挙げられる。モーリス・アギュロン『フランス共和国の肖像—闘うマリアンヌ 1789-1880』阿河雄二郎他訳、ミネルヴァ書房、1989年。